



三重県公立小中学校教頭会
〒514-0003 津市桜橋 2 丁目142
教育文化会館別館 3 階
TEL 059(228)2340
FAX 059(228)2271
E-mail : mieheadt@hyper.ocn.ne.jp

第56回全国公立学校教頭会研究大会秋田大会

豊かな人間性と創造性を育む学校教育

絆を大切に 生涯にわたって
自立・協働・創造していく子どもの育成



第 1 A 分科会

教育課程に関する課題（小中一貫教育）を考える

四日市市立三重西小学校 前 田 典 昭

「学校が変わり、地域が変わり、そして、子どもたちが光り輝く宇治市の小中一貫教育」

（宇治黄檗学園の教頭先生より）

宇治市では、平成24年度から市内すべての小・中学校において小中一貫教育を実施している。

とりわけ「宇治黄檗学園」は、宇治市初の「施設一体型」「積み上げ方式」の小中一貫教育校である。

「積み上げ方式」とは、小学校を母体に、その卒業生を新たに開校した中学校に入学させるというものであり、文字通り小中一貫校となっている。中学1年生が7年生、中学3年生が9年生である。

黄檗学園では、義務教育9年間を見通した特

色ある教育活動として、以下の実践を進めている。

○中学校教員による小学生の指導（4～6年の



音楽、5・6年の外国語活動)

- 小学校高学年の教科担当制
- 全校共通の学習規律、学習カード
- 小・中教員での合同授業研究
- 6年生の中学校体験授業
- 5～7年生による共同学習
- 異年齢集団活動
- シラバスの公開（児童会と生徒会の一体化）
等々

上記提言に基づいて、小グループで意見交換を行った。

全国的には、小中一貫教育がそれぞれの学校・地域の実態に応じて実施されている。しかし、その多くは中学校区ごとの「施設分離型」である。小中学校の物理的な距離は、一貫教育を実践するにあたっては大きなハードルとなっていることは否めない。

宇治市の提言を基に、各中学校区の小・中学校が地域の実態に応じて、できる範囲の中で実践を積み重ねたいものである。その際、気を付けたいことは、小中一貫教育は「目的」ではなく「手段」であるということである。そして、小中の教職員が互いに共通理解を図り、児童生徒の「望ましい変容」を目指して取り組むための組織づくりを進めていくことが教頭の役割の



一つであることを確認した。

秋田の地が集った全国の教頭先生方の熱い思いに触れ、5年目教頭の私にとって、刺激の大きい研究大会となった。私が所属した分科会17グループの構成は、秋田・岩手・茨城・神奈川・高知の教頭先生方であった。フリートークにおいて、岩手県の陸前高田市の教頭先生の学校では、未だに運動場に仮設住宅があるとのこと。震災の爪痕が今なお続いていることを痛感した。神奈川県では、政令指定都市もあり、行政的にも教育の考え方は様々だということ。正に全国大会に来たとの実感である。このような機会を与えていただいたことに感謝し、今後の精進を決意する次第である。



第1B分科会

「教育課程に関する課題」に参加して

菰野町立鶴川原小学校 小 森 正 春

私が参加した分科会では、午前、午後各1本、合わせて2本のレポート提案がありました。午

前は、「心豊かな子どもをはぐくむ『ふるさと教育』の推進に果たす教頭のかかわり」という



テーマで提案がありました。

「ふるさと教育」とは、地域の人々との交流や自然体験、生産体験、職場体験等を通じて、ふるさとへの愛着と誇りを育て、地域に貢献する心豊かな人間性を育む教育であり、提案のあった島根県では、この「ふるさと教育」を県内小中学校の全学級で、年間35時間以上の学習を行っています。分科会では、学校と地域が一体となって子どもを育てる「ふるさと教育」を推進する取り組みの中で、教頭の役割について話し合いを行いました。

多くの地域において行われていると考えられるこの「ふるさと教育」が、ある一定の予算の中で、地域に根差して実施されている点、また校内に「ふるさと教育推進委員」として位置づけ取り組んでいる点など、地域の特徴を生かしながら子どもの健全育成に取り組んでいる姿を各教頭先生から報告がありました。

特に話し合いの中では、地域教育推進者（地域コーディネーター）を外部の地域交流センターが担っている地域もあり、そこでは教頭と連携して、情報の提供（人材の提供等）を行い、「ふるさと教育」の推進に大きな力となっている紹介がありました。ただ、やはり全体的には

教頭が地域教育推進の役割を担っているところが多く、連携を進める上では、教頭の地域との信頼関係の構築が大切であることを改めて確認しました。また、東京などのように都心部では、人の出入りが多く、昔からそこに住んでいる人が少ない等「ふるさと教育」を推進していくことの難しい一面も出されました。

今回提案された中に、「地域医療学習」をテーマに「病院で働く人と出会おう」と題した内容がありました。子どもたちが学習を通じて、生命の大切さ、他者への思いやり、働くことの尊さを学び、ふるさとへの思いを強めた取り組みの紹介があり、ふるさと教育の効果の一面を見ることができました。

午後からは、「^{しのめ}東雲ブロック小中連携に果たす教頭の役割」というテーマで提案がありました。どこの地域でも行われている小小連携、小中連携ではありますが、この連携をよりスムーズに実施していくために、この東雲ブロックでは、①問題行動を起こす児童生徒の指導 ②不登校及び不登校傾向の改善 ③学力向上の3点を課題にして、これらを克服する上での連携の在り方、教頭の果たす役割についての提案がありました。

話し合いの中では、教頭同士が連携して行事カレンダーを作成する、研究主任等による学習の約束の作成等9年間を見通した連携が大切であるという話が行われました。また、出前授業、体験授業、授業参観等も定期的に行い、職員が行き来できることも連携していく上では大切であるという話し合いがなされました。中でも特に必要なことは「教頭同士」「職員同士」が親しくなることが連携では大切であり、「飲みケーション」を通して、お互いを知ること

要となることも話し合いました。

助言者の先生からは、連携をしていく上で大切なこととして、

①必要性を出すことによって連携につなげることができる。

今回の提案であった3つの課題を克服するために連携を行うことは意義がある。

②お互いに要求することばかりでは、関係を悪化させるので、教員の負担感をなくす取り組みも必要・・・教員同士のコミュニケーションをはかることが大切。

③9年間の一貫した見通しが大切・・・「学習の約束」を作成し連携していく。

等の助言がありました。

また、連携していく上では、行き来が容易であるということも要素の一つであり、互いに離れた学校同士での連携は、困難な部分もあるということ。そこで、必要な部分での連携を考えていくことも大切になってくるということ。また、中学校への進学が複数校に渡るときは、中中連携も必要になってくることも助言者の先生



から話がありました。

本研究大会に参加させていただいて、各地域（都道府県）の現状が大変よくわかりました。社会の変化により、学校で抱える問題は様々の中、各地区の教頭先生が今できることに取り組んでいる姿に大変感銘を受けました。また、いろいろな方とお話することで、全国の情報も得られ自分を振り返る良い機会にもなりました。こういう機会を得られたことに感謝し今後の職務への活力にしていきたいと思えます。



第2分科会

小・中の円滑な連携をめざして

熊野市立新鹿中学校 長 嶋 一 朗

初めての秋田。そして、初めての全国教頭会研究大会は充実した3日間でした。大会終了後にかかれる秋田の竿燈まつり。直前で帰らなければならぬので、残念な思いもあったが、全体会の前の郷土文化紹介で小学生の竿燈を披露してもらいうれしかった。伝統文化を受け継ぐ

子供たちの熱気あふれる演技に感動した。

2日目の分科会は私は第2分科会「子供の発達に関する課題」に参加した。3本のレポート発表があり、その内2本は小中連携を中心とした取り組みで、あと1本はキャリア教育の実践に関するレポートであった。特に私が注目した



のは愛媛県西宇和郡伊方町教頭会の発表である。四国の地形を思い浮かべてほしい。四国には4県あり、左上にあるのが愛媛県で、その左端が突き出している。そこに、西宇和郡伊方町がある。小中連携でのレポートであったが、特筆すべきは以前には伊方町には小中連携の組織がなく、その必要性を感じた教頭会自らが動き「伊方町小中連携協議会」を発足させ、教職員にアンケート調査を行ったり、交流活動の見直しを行ったりした。それがきっかけとなり平成25年度には町の教育委員会に「つながり委員会」という小中連携の組織ができた。教頭会が必要性

を感じ、積極的に動いた結果、町教育委員会を動かすまでに至ったということはみんなの思いが集まれば、それが動きになり、流れを変えることができるのだと改めて思った。

他には福島県田村地区の教頭会からは幼小中連携の取り組みをしており、幼小中連携授業研究会や生徒指導協議会等の組織があり活動しているということであった。また、干拓で有名な八郎潟にある中学校からは小学校と中学校が連携をしてキャリア教育を行っているという報告があった。

どのレポート発表も練習をしっかりとやっているせいか、わかりやすく、聞きやすかった。発表後の研究協議の中でも他の県の様子がよくわかり、とても有意義であった。その中で特に印象に残ったのは、本当に教師も管理職も忙しく、まともに休暇がとれていない実態があるということであった。新たな課題について取り組む必要があるが、これ以上先生方に負担をかけるのはつらいという意見が多かった。最後にお互い体だけは大事にしてがんばりましょうと声をかけ別れた。いろいろなこと学び、考えさせられた3日間だった。



第2分科会

小中連携推進における教頭の役割

東員町立城山小学校 藤本 昭彦

第2分科会は、全国各地から集まった220名の副校長・教頭が34のグループに分かれて開催された。

「小・中の円滑な連携をめざして」～小中連携

の組織における教頭の役割について～（愛媛県西宇和郡教頭会）

「固定化された人間関係」「コミュニケーション力の低下」「中1ギャップ等の問題」「学力停

滞の問題」等の課題を解決するために、小中連携の組織的活動を推進している取組の報告であった。教頭会が中心となって、平成24年度に小中連携協議会の組織を発足し、平成25年度には「つながり委員会」として町教育会に位置付けた。会の運営は、教頭がリーダーシップをとり、各校のミドルリーダーを集めて年間計画を作成し実践研究を進めた。3つの研究班によって、「小中連携による交流活動や防災教育の実施」「交流学习の実施や家庭学習の定着のための取組」「生活習慣の定着や規範意識の向上のための取組」等について取り組んだ。教頭会が中心となって組織を立ち上げて取り組んでいる素晴らしい実践であった。

「教頭の役割を明確にして推進するキャリア教育の実践」～秋田県学習状況調査質問紙調査の活用を通して～（秋田県潟上市・南秋田郡・男鹿市教頭会）

キャリア教育推進モデル（潟上市モデル）を各校で実践し、その有効性を検証する研究であった。それに併せて、実効性のある取組となるための教頭としての役割を明確にする研究であっ



た。秋田県独自で実施している学習状況調査の質問紙調査項目とキャリア発達に関わる諸能力とを関連づけ、児童生徒の課題を明確にし、その中で取り組むべき重点課題を設定し、キャリア教育全体計画を作成し取り組まれている。小・中連携では、各校が進めているキャリア教育を9年間のスパンで見直し、小学6年と中学1年の接続に重点を置いて取組を進めている。教頭としての関わりは、実践内容の評価・検証について、主任層と共通理解し、次年度の内容について主任層とともに検討するというものであった。



第3分科会

学校の情報化と教頭の役割

伊賀市立大山田中学校 西岡道啓

佐賀県内の小学校より「学校の情報化と教頭の役割」と題して、学校運営の改善につながるICTの活用法を探り、教頭としてどのように校務の情報化を推進していくかについて提言がありました。

具体的には、会議の効率化を図るために職員会議のペーパーレス化に取り組み、これにより、担当者の資料作成にかかわる印刷業務がなくなるだけでなく、会議の効率化が図られ、会議時間の短縮にもつながり、勤務時間内にすべての



会議が終了するようになったそうです。また、グループウェアを活用することにより、教職員間の情報伝達・連絡が素早く容易になり、教職員間の共通理解が図れるようになり、「SEI-Net」を活用することによって、事務処理の窓口が佐賀県で統一され、校務がより効率的に進められるようになったとのことでした。今後は、通知表・指導要録・出席統計・校務日誌・保健日誌・学級編成・時間割・保護者への緊急メール機能等が順次追加されていく予定だそうです。

学校の情報化はすごいスピードで進んでいます。しかし、何もかもパソコンに頼りすぎると、大震災等がおこったとき学校の機能がはたらかなくなってしまうので、非常時の対応を考えておく必要があると思います。また、ICTの利用拡大にともない、子どもたちの書く力や文字に対する価値観に変化が生じる可能性があります。そこで、私たちは学校の情報化を図ると同時に、手書き文字のもつ温もりや、手書き文字から伝わる思い、といった手書き文字の良さを見直し、日本人として文字を大切にす文化や、文字に対する価値観を次世代に残していきたいと思いました。



第4分科会

小グループ討議の中で

鈴鹿市立石薬師小学校 弓削弘嗣

第4分科会は『組織・運営に関する課題』として、1グループ6人が38の小グループに分かれて話し合った。提言いただいたレポートは、北海道八雲町立八雲中学校の池田教頭『豊かな人間性と創造性をはぐくむ学校をめざして』～学校組織の活性化と教頭のあり方～、岩手県宮古市立第一中学校の小林副校長『学校運営の活

性化を図るための副校長としてのかかわり』～職員への意図的な働きかけを通して～、秋田県大仙市立花館小学校の高野教頭『学校組織・運営の活性化を図るための教頭のかかわり』～全職員が参画できる学校評価のあり方～の三つであった。各々組織運営に関する提言であり、副校長・教頭として学校課題の解決に向け、調和

のとれた学校運営のあり方を学ぶ上で大変参考になった提言であった。その中で、我々小グループの岩手、秋田、福島、神奈川、大分と三重の6人で討議の深まった大仙市立花館小学校の提言を簡単に紹介したい。

学校評価に全職員が参画できるためのポイントは、学校評価の具体的な指標づくりを職員が行い、実践の前に職員が評価指標を意識し、「目標達成状況の診断・分析・改善への方策の検討」に職員が効果的にかかわることであった。もう一つは、PDCAサイクルを、PDCA・CAサイクルとして、年度途中での進捗状況を保護者や地域住民に公表していることであった。ここまでの、第4分科会に参加しての報告である。しかしながら、小グループ討議は時間があり、他県の副校長・教頭が参加するせっかくの機会であったので、学力向上に向けて、どのように取り組んでいるのか小グループで情報交換をした。

他県の取り組みで印象的であったことを紹介



したい。本県では、「みえスタディ・チェック」が進んでいるところであるが、小グループ参加の他県では、数年前から同様の取り組みがあり、秋田では、県でも市でも各々教育委員会が課題解決に向けて実施している。また、授業が大切であることから、優れた教師（スーパー教師なるもの）を、課題があるとされる学校へ約一ヶ月間程度、県から派遣し、徹底的に授業改善に取り組んでいるとのことであった。



第5 A分科会

初めての秋田、全国教頭会に参加して

松阪市立山室山小学校 吉川篤博

2日目は、第5 A分科会「教職員の専門性に関する課題」に参加しました。

この分科会のテーマは、①「ベテラン教員を活用して、若手教員の資質向上を図るために、教頭はどうかかわればよいか。」②「教頭の指導力向上のために、教頭会の役割はどうあればよいか。」の2つでした。午前中は、埼玉県秩

父地区小・中学校教頭会、横瀬小学校の門倉先生のレポートの発表がありました。「教職員の資質向上にかかる教頭の役割」という、秩父地区1市4町の23小学校14中学校の教頭会が調査し、研究課題をまとめた発表でした。若手教員の資質・能力向上のための研修や、研修でベテラン教員の活躍の場をつくること、ワークショッ

プを取り入れた授業技術の向上を図る研修などが紹介されました。発表の後のグループ討議で各都道府県の交流を図りました。その中で、1年間に1000回を目標に教室訪問をして、授業の感想や教室の掲示について若手教員と交流を図っている埼玉県三郷市の取り組みや、情報共有システムを使って、授業に必要なデータを共有し、交流している山形県新庄市の取り組みなどが紹介されました。

午後からは、山形県飽海地区小・中学校教頭会、地見興屋小学校の鈴木先生のレポートの発表がありました。山形県飽海地区（酒田市・遊佐町）の31小学校8中学校の教頭会が「教職員の資質向上を図る手立てと教頭のかかわり」という研究主題に基づいて、35項目のチェックシートを作り、また「教頭会たより」を発行して、

教頭のかかわり方を考えたレポートでした。チェックシートが非常に細かい点にまで書かれていました。発表の後のグループ討議では、自己評価シートを活用した宮崎県都濃町の取り組みや、情報共有システムを使って、市内の小中学校のパソコンを結び、教頭会のフォルダーを使って必要なデータを入れて、教頭同士で自由に見て、必要なデータを取り出すといった埼玉県三郷市の報告があり、とても参考になりました。

食事や飲み物が美味しい秋田で充実した3日間を過ごすことができました。残念だったのは、三重県の先生方と交流することができなかったこと。できれば夜に交流会などができればと思いました。行かせていただきありがとうございました。



第6分科会

副校長・教頭の職務内容や職務機能に迫る課題について

大台町立三瀬谷小学校 栗谷 徹

第6分科会は、全国公立学校教頭会総務部・調査部が初めて提言主体となって運営された。



即ち「実践報告をもとに協議をおこない、課題に迫る」という分科会の進め方ではなく、全公教総務部・調査部が全国の教頭並びに副校長（以下、教頭と表記）に対しておこなったアンケート結果の分析と、それをもとにした提言について協議を進めた。小グループに分かれておこなった討議は、教頭会の教育政策提言活動についての認識を深める場となった。

全公教総務部・調査部からの提言テーマは3つあり、1つめは、「教頭として魅力ややりがいをもって職務を遂行するために」であった。



当該部が行った調査結果からは、「校内研究や研修、職場の人間関係づくり、教職員の評価・育成という部分で時間と労力を費やしたい」と多くの教頭が答えていて、このことにやりがいを感じていることがわかった。しかし、実際に時間と労力を費やしているのは、「教育委員会等からの各種調査依頼への対応」、「保護者やPTAとの連携」の割合が高く、思いとは異なる実態であった。このギャップを埋めていくことが課題となった。

折しも、本県教頭会の調査部がこの6月に、県内約550人を対象に実施した教頭アンケートにおいても、上記と類似した結果がでていた。そこで、本県調査部が例年より突っ込んだ調査

をしたことや、その生かし方などについて紹介し、意見や情報を交流することができた。

2つめの提言テーマとして、「若手教職員やミドルリーダーを育成する効果的な方策とは」ということについて話し合った。若手教員を育てていくためには、ミドルリーダーを育てなければならない、ミドルリーダーを育てていくためには、教頭が元気でなければならない。教頭が明るく元気でかっこいい姿を見せ、教職員のよさを認め、努力する方向性を示すことで、ミドルリーダーが育ち、ミドルリーダーが育つことで、若手を育てていこう、と確認された。

3つめは「魅力ある学校づくりを実現するために、今できること」について話し合われた。魅力ある学校づくりのためには、地域人材の活用が大切である、また、教育環境の充実が必要である、ということが論議された。

第6分科会は、33グループに分かれ、全国各地の取組交流も含めて、活発な話し合いが行われた。上記の提言テーマに関わる内容だけでなく、一人ひとりの教頭が「今、がんばっていること」や「悩み」を共有することもできた。たいへん有意義な分科会であった。





特Ⅰ分科会

出羽国で学ぶ21世紀型学力の育成

桑名市立七和小学校 早川 由 浩

平成26年度全国公立学校教頭会研究大会が7月30日（水）～8月1日（金）に秋田県秋田市において開催された。

東北に出向くのは人生で5度目となるが、不思議と秋田を訪れるのは初めてであり、片道6時間を要する新幹線がいささか退屈ではあるものの、楽しみにしていた研修の一つでもあった。

本年度の全国統一研究主題は第10期研究1年次として、「豊かな人間性と創造性を育む学校教育」となっており、これまでの研究を継承・発展するものとして、キーワード「生き抜く力・絆づくり」が設定された。

大会2日目の分科会は千秋公園（久保田城跡）内の秋田県民会館で行われ、私は特別分科会Ⅰ「21世紀型学力の育成をリードする副校長・教頭の役割」に参加した。

学力調査で全国トップクラスである秋田県では、教頭がどのような役割で成果を残しているのかが大きな関心事であり、参加者の誰もが知り得たい内容である。



午前の講義で特に印象的であったのが、アメリカのキャシー・デビットソン氏の「2011年に入学した子どもが就職する時、今ある仕事の65%は無くなっている。」という研究発表を引用した話である。

社会が絶えず変容する中であって、教育もまた変革の必要に迫られる事は当然である。今までの教師を中心とした「受身・個別」学習から、自発的な「探究・協働」学習に力を入れる事が重要であり、その具体的な取り組みの一つが「総合学習」であると力説された。

全体会、分科会を通じて常に話題となる「秋田県の学力」は、子ども自らが経験をしながら抱く疑問、それを解き明かそうとする意欲によって支えられており、総合学習の効果的な活用のためのコーディネート、マネジメント、デザイン力が教頭として求められると締めくくられた。

余談ではあるが、2日後から開催の「竿燈まつり」は残念ながら見学出来なかったものの、夕食時には秋田名物「きりたんぼ」を食しながら

ら地元の方に郷土のお話を伺った。
今回のみちのく（本来は陸奥国か）研修は、

私にとっても大変に有意義な「総合学習」とな
った。



特Ⅱ分科会

未来につなげる「秋田の教育、日本の教育」

御浜町立尾呂志学園小学校 田垣内 康 夫

思い起こせば秋田大会とほぼ同じ32年前のこの時期に、私は秋田の地にいました。目的は秋田県の教員採用試験を受けるため「何故、秋田なのか」のもっと深い理由は、ここでは内緒にしておきます。

さて、今回の参加で知り得た秋田の教育は、誰もが認める教育の基本、つまり「当たり前」のことが当たり前ができる」ように、子どもに徹底して指導しているということでした。

①生活・授業規律の定着では、挨拶、座り方、話の聞き方、掃除の仕方等に留まらず、授業での挙手の角度や声の大きさ、机上の文房具の配置にまで、守らせるべききまりを子どもたちにきちんと守らせている。

②①の確実な定着を踏まえて、「一人で考えグループで考え思考を深め言語化する授業」「地域学習」「家庭学習」等の充実に、取り組んでいることでした。

常に全国学力・学習状況調査で最上位の結果を出していることへの県教委や教頭先生方の反応は「当たり前」のことが当たり前に来てきただけで、私たちこそこの結果に戸惑っている」といって謙虚な声ばかりでした。

こうした発言の背景には、昭和31年から3ヶ年実施された「全国学力テスト」の秋田県の結果は、45位前後と低迷していましたが、この結果に衝撃を受けた県教委が内容を分析し市町村

教委、小中学校長会と課題を共有した上で、学校と同一歩調の取組をほぼ40年に渡って行ってきた実績があります。

また学校は生活・授業規律の改善を。県教委は一人で考えグループで考え思考を深め言語化する授業、地域学習の導入といった具合に、学校からのボトムアップと県教委からのトップダウンによる取組がうまく融合する中で、秋田の教育が形作られてきたこと。そしてこれらの取組は、全国学力・学習状況調査の特にB問題への対応を、結果的に先取りするものだったのです。

「当たり前」のことが当たり前。」この言葉の深さを噛みしめつつ、①県教委と学校の教育課題の共有と連携、②教職員の粘り強さと熱意等が、今日の秋田の教育を創ったのだと納得しました。秋田の教育と三重の教育、単純に比較はできませんが、これからは色々と考えていこうと思います。同行のN先生ともども、またとない有意義な研修機会となりました。



ランニング

津市立高茶屋小学校 細井美彦

わたしは10年ほど前から、ランニングを続けています。きっかけは何か自分でも思い出せないぐらい、なんとなく始めたように思います。ランニングをしていることを話すと「そんなしんどい事、どうしてするの」と聞かれることがよくありますが、それに対する答えは、いくつもあります。

「いつでもやりたい時に、やりただけでできること。」他のスポーツは、様々な道具を揃えたり、相手が必要だったりして、気軽に自分一人で自由に行うことができませんが、ランニングは自分のペースでやりたいようにできます。マイペースのわたしには、そこがとても心地よいところです。

「いろんな場所でできること。」自宅近くの田園風景を見ながら走ったり、少し足を延ばして海岸沿いの堤防を走ったりします。時には、数人で公園のトリムコースや峠道なども走ることがあります。旅行先の朝、初めての景色を眺めながら走ると、とてもすがすがしい気持ちになります。

「走っていると肌で季節を感じられること。」暑い時は、汗をふきふき走り、日差しの強さを実感します。寒い時はふるえながら走りはじめ、風が冷たくなったことを感じます。季節の移り変わりに気づいた時、何か少し嬉しい気分になります。

「たくさんのつながりができること。」走ることによって、一緒に走る仲間ができます。その人たちと大会に参加したり、練習をしたりすることがとても楽しく感じられます。年齢や職業など様々な人たちと話すことは、とても刺激になります。

毎年の新年会も楽しみの一つです。

「体が軽く動きやすくなること。」体が動くことで、様々なスポーツをする意欲がわいてきます。近所の人とテニスをしたり、フットサルチームを作って試合をしたり、体を動かす機会が増えてとてもすっきりします。

「体力がついて、長時間の活動ができること。」これは、いろいろな事に良い影響があります。一生懸命遊び楽しい時間が長続きしますし、仕事でも長時間勤務に耐えることができます。特に教頭の職務上体力はとても必要なので、体力勝負でやっていきます。

なんとなく始めたランニングですが、このように楽しいことがたくさんあって10年続いています。これからも、年に数回大会に参加し、時には一人で、時には仲間と走ることを楽しんでいきたいと思います。今から何年続くか分かりませんが、楽しめる間は続けていくと思います。



地域と連携した継続的な防災教育

志摩市立国府小学校 舟戸清子

全校児童は70名、学校の東方向の海岸には広大な砂浜が広がり、一年を通してサーフィンを楽しむ観光客が「国府の白浜」を訪れます。その一方で、南海トラフ地震発生による理論上最大津波高は12m、到達まで16分と予測される地域でもあります。そのため、地域全体に災害への防災意識が高く、学校行事だけでなく防災教育の面でも地域の方々の協力があります。主な取り組みを紹介します。

① 拠点学年（4年生）を中心とした防災学習：
○建設された新避難所について調べてわかったこと、考えたこと、地区の安全避難について、学校のみならず地域の方に紹介する。○聞き取り、調べ学習、防災タウンウォッチング、防災マップ作製等を通して、地区の防災安全について考えたり

調べたりしたことを発表し、自分や家族の命を守るためにできることを考える。○防災カレンダーをつくり地域に配布する。②防災研修会、防災体験学習：市防災対策室より防災技術指導員を招き、自治会、保護者、幼小教職員対象の防災研修会を行った。県教委防災体験事業として学校防災技術指導員を招き、幼小の園児、児童、保護者、地域の方々と防災体験学習及び合同避難訓練を行う。（土曜授業）③地震・津波を想定した避難訓練：授業中、休憩時予告なし、下校時等、設定を変えた地震発生津波避難訓練を小学校単独または幼稚園・保護者・地域の方との合同避難訓練の形で実施している。これからも学習成果を地域に発信し、地域ぐるみで防災学習を進めていきたい。

